

横田英史の 書籍紹介コーナー



修理する権利 ～使いつづける自由～

アーロン・パーザナウスキー、西村伸泰・訳
青土社 4,840円(税込)

スマホやパソコン、医療機器、家電製品を修理しながら使い続けられない現状を問題視し、その原因を分析するとともに在るべき姿を探った書。法律や社会的規範、市場など多角的な視点から問題点を明らかにする。また保証期間を過ぎると急激に劣化したり、壊れやすくなるように設計する「計画的陳腐化」も狙い上げる。

使用済みの製品を修理する「リマニュファクチャリング」は新たな潮流になっている。筆者が厳しい視線を送る米アップルも、こうした状況に対応する姿勢を見せる。EUが2024年1月に「修理する権利」を法制化したり、ニューヨーク州が23年2月に「Digital Fair Repair Act」を制定するなど、法的規制の動きも着実に広がっている。時宜にかなった内容であり、今読むべき本の一つだろう。著者は法律の専門家であつた理屈っぽいが、決して読みづらくはない。

ニューロテクノロジー ～脳の監視・操作と人類の未来～

ニタ・A・ファラハニー、鍛原多恵子・訳
河出書房新社 2,750円(税込)

脳の情報を収集・追跡・トレース・操作・監視・記録・格納するニューロテクノロジーの最前線を紹介するとともに、問題点と対応策を提示した書。BMIやEEG(脳波)セ

ンサーを従業員に装着させて疲労度を計測・管理するのは序の口。脳を操作して売りたいものを消費者に買わせる「ニューロマーケティング」や、犯罪捜査に用いる「脳指紋法」などの事例には驚かされる。

脳のハッキングの実態は凄まじい。大学生による、脳を活性化する「ブレインエンハンサー」の乱用。学業成績を上げるために、健常な大学生がADHD(注意欠如・多動症)治療薬を服用する。PTSDの治療にも脳波データを用いる。脳の動きをトラッキングしながらトラウマの原因を消し去る。

筆者は、個人情報と尊厳の侵害に危機感を募らせる。「認知的自由」と呼ぶ新たな権利で規制する必要性を訴える。

書くことのメディア史 ～AIは人間の言語能力に何をもたらすのか～

ナオミ・S・バロン、古屋美登里・訳、
山口真果・訳
亜紀書房 3,960円(税込)

AI(生成AI)をはじめとする情報技術が、人間の言語能力や言語活動に与える影響について論じた書。社会や文化、生活、学校教育など多角的な切り口で考察する。焦点の一つが「書くこと」である。手で書くことが読み書き能力の向上や学習において有益であり、知能や精神に好ましい影響を与えると説く。AIについては、人間の知能に対抗できる仕組みの構築ではなく、人間の取り組みを拡張することが肝要だとする。

本書はまず、文字を「書くこと」と「書き

直す」ことの重要性を歴史を踏まえて論じる。同時に、人間が文章を書く環境をAIが侵食しつつある現状を明らかにする。ジャーナリスト、法律家、翻訳家への影響を取り上げる。今後はAIエージェントの登場で、人間とAIのチームワークが進展し、「ヒューマン・イン・ザループ」が重要になるとする。

迷走するボーイング ～魂を奪われた技術屋集団～

ピーター・ロビンソン、茂木作太郎・訳
並木書房 2,420円(税込)

技術と人命を蔑ろにした巨大企業・米ボーイングの破滅までの過程を丹念に追ったノンフィクション。技術と品質重視の技術者集団だった米ボーイングは、GE流のコストカッターに乗っ取られ利益追求と株主優先に走った。コスト削減に血道を上げ、品質は徹底的に軽視された。それが346人の乗客乗員が犠牲となった「ボーイング737MAX8」の墜落事故につながった。

737MAX8の設計から認証、生産にいたる8年間に焦点を当て、ボーイング社内意思決定プロセスや安全管理の問題、連邦航空局の責任を追及する。当事者の証言や裁判記録、当時かわされたメールなどに基づいた語り口は迫力がある。737MAX8は、価格を見かけ上安く見せるために、警報装置を含め多くの機能をオプションにした。新規シミュレータも開発せず、航空会社の乗員のトレーニングもおざなりだった。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。
川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役役に就任。2018年3月退任。
2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀨舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係ありません。

